中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県八頭郡河原町

高福大将軍遺跡

2002

財団法人　鳥取県教育文化財団

ＳＤ２出土遺物

遺構外出土遺物・緑釉陶器

遺構外出土遺物　青磁・白磁

中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県八頭郡河原町

高福大将軍遺跡

2002

財団法人　鳥取県教育文化財団

序

鳥取県は北に日本海を望み、南には秀峰大山をはじめとする中国山地が連なり、鳥取砂丘、山陰海岸に代表される風光明媚な美しい自然に囲まれた土地です。観光資源、農林水産資源に恵まれた当県では、環日本海交流の推進が提唱されるなか、産業の発展、地域の活性化に向けて、近年、道路交通網の整備・充実が一段と進められています。こうしたなか、開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も増加しており、鳥取県の成り立ちを物語る遺跡が数多く発見されております。

当財団では、中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭（ちず）～鳥取間）整備事業に伴い、平成13年度、河原（かわはら）町地内おいて埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査の結果、弥生時代から鎌倉時代にいたる多数の土器および溝状遺構、掘立柱（ほったてばしら）建物跡などが確認されました。

本発掘調査の成果が、今後の調査研究や教育の一助となり、多くの方々に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大な御協力をいただきました河原町地元の皆様をはじめ、御指導いただきました方々、関係機関各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団

理事長　有田博充

例　　言

1．本報告書は、「中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査」として、平成13年度に鳥取県八頭郡河原町高福で実施した埋蔵文化財発掘調査記録である。
2．本発掘調査は、財団法人河原町教育文化事業団の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。
3．本発掘調査は、下記の遺跡を対象として行われた。
　高福大将軍遺跡（鳥取県八頭郡河原町高福字大将軍、字比丘尼屋敷、字口イソフ谷）
4．本発掘調査の実施にあたっては、調査地内の地形測量および基準杭の設定、ラジコンヘリコプター及びラジコン飛行機による調査前空中写真撮影をそれぞれ業者に委託して実施した。
5．本報告書に掲載した地形図は国土地理院発行の1/50,000地形図「鳥取南部」を使用した。
6．遺物写真の撮影にあたっては、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の牛嶋茂氏、杉本和樹氏にお願いした。遺構写真は調査員が撮影した。
7．出土遺物および発掘調査によって作成された記録類は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
8．本報告書は調査員の討議に基づいて作成した。編集は鬼頭が担当した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は鳥取県埋蔵文化財センターで作成した。
9．発掘調査から報告書作成に至るまで、多くの方々からご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して深謝いたします。
　河原町　河原町教育委員会（順不同、敬称略）

凡　　例

1．報告書における方位はすべて座標北を示し、レベルは海抜高である。X＝、Y＝の数値は、国土座標第Ⅴ系の座標値である。
2．報告書において採用した遺構の略称は、以下のとおりである。
　SD：溝状遺構　　SB：掘立柱建物跡　　P：ピット
3．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外のものは断面白抜きで表した。
　遺物実測図における表示は以下のとおりである。
　　：赤色塗彩　　：内黒焼成
4．遺物実測図における縮尺は、下記のとおりである。
　土器１：４　土製品１：２　鉄器１：２　石器１：２
5．出土遺物には基本的に、遺跡の略称（TDS）、出土位置（グリッド名）、遺構名、取上げ番号、出土年月日を注記している。発掘調査時における遺構名は報告書作成時に大幅に変更しており、遺物には旧遺構名を注記しているため、第１章に「遺構名新旧対照表」を示した。
6．出土遺物の時期決定に際しては、下記の編年案を参考にした。

　山本信夫　1999「中世前期の貿易陶磁器～その分析視点～」『原遺跡七郎丸１地区・口寺田遺跡』国東町教育委員会
　中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
　八峠　興　1998「山陰における中世土器の変遷について―供膳具・炊飯具を中心として―」『中近世土器の基礎的研究』日本中世土器研究会
　松井　潔　1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第19集　古代吉備研究会
　清水真一　1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年～山陽・山陰編～』木耳社
　田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店

目　　次

序
例言、凡例
目　次
第１章　発掘調査の経緯……1
　第１節　発掘調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……1
　第３節　調査体制……2
第２章　位置と環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3
第３章　調査の概要……6
　第１節　調査の概要と基本層序……6
第４章　調査の成果……10
　第１節　溝状遺構……10
　第２節　掘立柱建物跡……18
　第３節　ピット群、ピット内出土遺物……21
　第４節　遺構外出土遺物……23
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　調査区位置図……1
第２図　河原町の位置……3
第３図　調査区周辺の字名……3
第４図　周辺遺跡分布図……4
第５図　２区調査前地形測量図……6
第６図　全体遺構実測図……7
第７図　１区、２Ａ区土層断面図……8
第８図　２Ｂ区土層断面図……9
第９図　SD１及び出土遺物……10
第10図　SD２及び出土遺物(1)……11
第11図　SD２出土遺物(2)……12
第12図　SD３及び出土遺物……13
第13図　SD４及び出土遺物……15
第14図　SD５及び出土遺物……15
第15図　SD６及び出土遺物……16
第16図　SD７、８……17
第17図　SD９……18
第18図　SD10……18
第19図　SB１及び出土遺物……19
第20図　SB２及び出土遺物……20
第21図　SB３……21
第22図　ピット内出土遺物……21
第23図　ピット位置図……22
第24図　遺構外出土遺物(1)……24
第25図　遺構外出土遺物(2)……25

図版目次

図版１　河原城より調査地をのぞむ
　　調査前空撮
図版２　１区調査前全景
　　２区調査前空撮
図版３　１区SD１検出状況
　　１区SD１完掘状況
　　１区SB１・２完掘状況
図版４　１区SD１土層断面
　　１区包含層遺物出土状況
図版５　２B区SD２断面
　　２B区SD２遺物出土状況
図版６　２B区SD２完掘状況
　　２B区SD３断面及び完掘状況
図版７　２B区SD３遺物出土状況
　　２B区SD４土層断面
　　２B区SD４検出状況
図版８　２B区SD４礫検出状況
　　２B区SD４完掘状況
　　２B区SD５完掘状況
図版９　２B区SD５土層断面
　　２B区SD６土層断面
　　２B区SD６礫検出状況
図版10　２B区SD７、８礫検出状況
　　２B区SD７土層断面
　　２B区SD８土層断面
図版11　２B区SD７、８完掘状況
　　２B区SD９検出状況
　　２B区SD９完掘状況
図版12　２B区完掘状況
図版13　２A区完掘状況
　　１区完掘状況
図版14　SD２出土遺物
　　SD３出土遺物
図版15　SD１出土遺物
　　P55出土遺物
　　遺構外出土遺物
図版16　遺構外出土遺物
図版17　遺構外出土遺物
図版18　遺構外出土遺物

挿表目次

表１　遺構名新旧対照表……2
表２　ピット一覧表……23
表３　出土遺物観察表……27

第1章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、中国横断自動車道姫路鳥取線（智頭～鳥取間）整備事業を原因とし、八頭郡河原町高福地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。

道路整備事業に先立ち、平成12年度に河原町教育委員会が高福地内の道路建設予定地の試掘調査を行ったところ、遺跡の存在が確認された。

鳥取県土木部道路課、鳥取県教育委員会、河原町教育委員会が遺跡の取り扱いに関する協議を行った結果、記録保存のための発掘調査の必要性が生じ、文化財保護法に基づく手続きを経て、平成13年度、財団法人鳥取県教育文化財団が発掘調査を行うこととなった。調査を担当したのは東部埋蔵文化財調査事務所である。

第2節　調査の経過と方法

高福大将軍遺跡は、千代川右岸に位置する。1区は平野部、2区は標高199mの通称高尾山から派生する尾根の裾にあたり、調査前の状況は1区が田圃、2区は畑地及び山林であった。

調査は平成13年5月より開始し、1区から着手した。表土剥ぎには重機を利用し、調査区の外周に排水用の溝を掘削したのち、排水溝の断面で土層を観察しながら遺構面まで表土を除去した。表土剥ぎ終了後、調査区内に10×10mのグリッドを設定した。調査区北西隅の杭を起点に南へ向かいA、B、C…、東へ向かい1、2、3…と番号を付し、北西隅の交点をグリッド名として呼称した。人力で遺物包含層を掘り下げ、一部で遺構面を確認、遺構掘り下げを行った後、1区の調査は7月19日に終了した。

第1図　調査区位置図

2区は調査前にラジコンヘリコプター及びラジコン飛行機による空中写真撮影、調査前地形測量をそれぞれ業者に委託して行い、7月下旬より、重機による表土剥ぎと平行しつつ人力による表土剥ぎ及び遺構検出に着手した。1区同様、表土剥ぎ終了後は業者に委託しグリッド杭を設定。標高の高い調査区の東側から調査を開始し、遺構の検出と掘り下げを西側に向かって進めていった。調査は10月31日に終了し、調査後地形測量は業者に委託して行った。調査面積は4,931㎡である。

第3節　調査体制

○調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団

理事長	有田　博充（鳥取県教育委員会教育長）
常務理事	関　敏之（鳥取県教育委員会事務局次長）
事務局長	岡山宏徳

鳥取県埋蔵文化財センター

所長	中村　登（県埋蔵文化財センター所長）
次長	小林　勉（4月1日から7月19日まで）
次長	加藤隆昭
調整係長	加藤隆昭（兼務）
文化財主事	高垣陽子
庶務係主任事務職員	矢部美恵
事務職員	大川秋子

○調査担当　東部埋蔵文化財調査事務所

所長	小林　勉（兼務　4月1日から7月19日まで）
所長	加藤隆昭（兼務　7月20日から）
調査員	鬼頭紀子　森本倫弘

○調査指導　鳥取県教育委員会事務局文化課　鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々が、発掘作業員、室内整理作業員として従事した。

安達かず江　小川邦子　川嶋彰　岸田由利　国本恵美子　国本美智子　下田茂登子
田中松子　田渕禮次郎　徳田とし子　中村鈴子　中山可子　中山百合子　中山義文
西田静子　西田幸雄　八田星代　林鶴子　前田市郎　前田静枝　森田輝子
表明美

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
SD1	SD1	SD6	SD6	SB1	P1～3、8～11
SD2	SD8	SD7	SD2	SB2	P20～22、24～31、75
SD3	SD9	SD8	SD4	SB3	P80、82、84、88
SD4	SD7	SD9	SD3		
SD5	SD5	SD10	SD10		

表1　遺構名新旧対照表

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

高福大将軍遺跡は、鳥取県八頭郡河原町高福に所在する。河原町は、鳥取県東部のほぼ中央部に位置する。東は八頭郡郡家町、船岡町、西は気高郡鹿野町、東伯郡三朝町、南は八頭郡用瀬町、佐治村、北は鳥取市に接しており、鳥取市と山陽地方を結ぶ国道53号線が、千代川に平行しながら町を縦断する形で走っている。千代川とその支流である八東川、曳田川とが合流する付近に広がる町東域の沖積平野に集落、耕地が集中しており、町の西方は急峻な山岳地帯が広がる。平野部では水田耕作が営まれ、山間部の比較的比高の低い場所では果樹園、畑地、放牧場などに土地を利用している。当遺跡が所在する高福は、河原町の東、千代川右岸に位置する。明治10年に旧八上郡高津原と福和田の２ヵ村が合併して成立し、両集落の頭文字をとって名付けられた。

第２図　河原町の位置

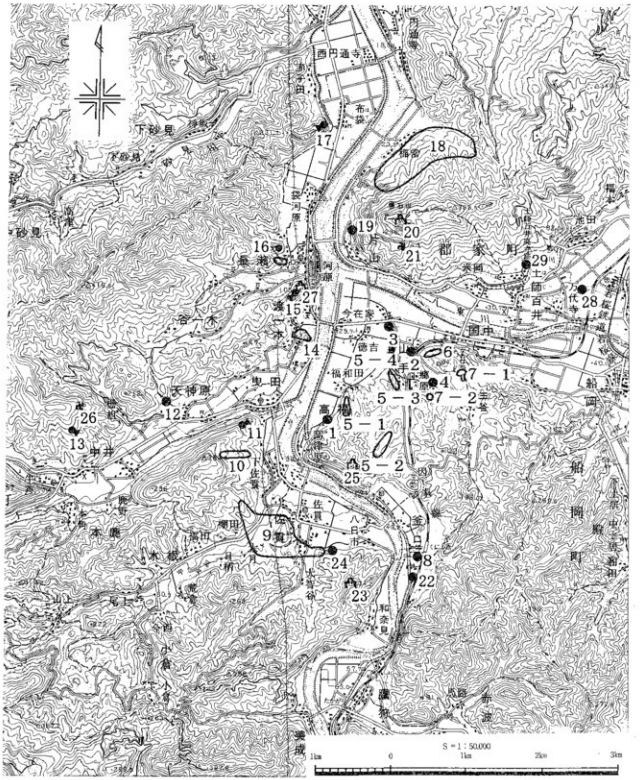
調査区は平野部である１区、高津原集落東側の通称高尾山から派生する尾根の裾部にあたる２区とに分けられる。調査前の状況は、１区は水田と畑、２区は畑と山林であった。

第２節　歴史的環境

河原町内の縄文時代の遺物としては、郷原の前田遺跡（２）から出土した縄文時代後期の土器、釜口の下中溝遺跡（８）から出土した縄文土器の細片が知られるのみである。

弥生時代の遺物としては、今在家の上土居遺跡（３）から出土した弥生時代中期の土器、下中溝遺跡から出土した弥生時代後期後葉の土器が知られている。遺構としては、前田遺跡から検出された後期後葉の掘立柱建物跡と土壙、郷原遺跡（４）から検出された後期後葉から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡３棟などが知られている。大半は、千代川と八東川の合流点より南東側の微高地または丘陵上に営まれた遺跡であり、河川の氾濫を受けない安定した土地に、古くから集落が開けていたことが窺える。

第３図　調査区周辺の字名



1．高福大将軍遺跡　2．前田遺跡　3．上土居遺跡　4．郷原遺跡　5．山手古墳群
6．加賀瀬古墳群　7．郷原古墳群　8．下中溝遺跡　9．佐貫古墳群　10．大半古墳群
11．嶽古墳　12．天神原須恵器窯跡　13．中井１号墳　14．渡一本古墳群　15．谷一本１号墳
16．長瀬古墳群　17．布袋１号墳　18．稲常古墳群　19．片山遺跡　20．最勝寺山城跡
21．最勝寺跡　22．釜山銅鉦出土地　23．舟形城跡　24．佐貫上台遺跡　25．高津原城跡
26．羽黒山妙玄寺跡　27．丸山城跡　28．万代寺遺跡　29．十師百井廃寺跡

第４図　周辺遺跡分布図

古墳時代には、山手集落南側の丘陵上に、山手古墳群（５）が築かれる。山手古墳群は４つの地区（５－１～４）に分散しており、１号墳（５－４）は鋳鏡（盤龍鏡）、勾玉、鉄鏃の出土が、７号墳（５－３の範囲）は変形神獣鏡の出土があったと伝えられている。山手古墳群（５－１、２の範囲）では、平成13年度に河原町教育委員会による試掘調査が行われている。従来、山手古墳群として12基が知られていたが、試掘調査の結果、新たに墳丘墓の可能性のあるもの１基と６基の古墳が発見された。５－１の尾根には古墳時代中期の古墳が存在する可能性があり、５－２の尾根は後期に築かれた古墳が中心のようである（註１）。当遺跡は５－１の尾根の裾に位置している。山手古墳群の北東の丘陵上には、加賀瀬古墳群（６）、郷原古墳群（７）が位置する。加賀瀬古墳群は４基の古墳からなり、その内２号墳は直径26mの円墳で、円墳としては町内最大規模である。郷原古墳群は三谷川を挟んだ２つの尾根上に位置し、７－１の尾根には全長30.5mの前方後円墳である郷原７号墳が存在する。また、千代川左岸の曳田の築瀬山から北東にのびる尾根の先端には、八頭郡最大の規模を誇る全長50mの前方後円墳である嶽古墳（11）が位置する。当遺跡から西に2.2kmほど離れた曳田川左岸の丘陵斜面には、天神原須恵器窯跡（12）が存在する。遺物は大甕から蓋坏まで多種にわたり、６世紀後半から末葉にかけて、３基以上の窯が操業していたと考えられている。当遺跡でも、同時期の須恵器が出土している。

律令時代の八上郡についての記述は、『公卿補任』宝亀３年（772）の条に始まる。大同３年（808）の項には八上郡と智頭郡の駅馬に関する記述もみられ、当時から山陽に連絡する交通網が開けていたことが窺われる。八上郡衙は、現在の郡家町の万代寺遺跡（28）と考えられている。「北官衙」、「中央官衙」、「西官衙」からなり、当初は北に置かれた郡庁が後に中央に移り、西官衙跡またはその周辺に正倉が建てられたと考えられている。万代寺遺跡の北西には、法起寺式伽藍配置をとる土師百井廃寺跡（29）が存在する。土師百井廃寺跡では、土器、硯、瓦、鴟尾、仏具、鉄釘などが出土し、軒丸瓦は土師百井式といわれる重圏文単弁８葉蓮華文である。これらは、古墳時代から平安時代にかけて、郡家町下坂、山田などで操業されていた私窯跡群で生産されたと考えられている。この時期の河原町内の遺構としては、郷原遺跡で掘立柱建物跡10棟、土壙、柵列が検出されている。単弁７葉蓮華文軒丸瓦も出土しており、万代寺遺跡や土師百井廃寺跡との関係が注目される。また、下中溝遺跡からは、須恵質の土馬と土師質の獣形土製品が発見されている。

河原町内には、平安朝以降鎌倉期までに知られた荘園として、高野山領岩田荘がある。岩田荘は律令時代の八上郡12郷の内の旧石田郷にあたる。『因幡民談記』寛文年間（1661～1672）によると、岩田荘19ヵ村の中に高津原村の名が見える。創立年代は不明であるが、高津原集落の東麓に控える通称高尾山の頂部には、中世の山城と思われる高津原城（25）が築かれており、地元の人々には高平城とも呼ばれている。

千代川左岸、当遺跡から南へ約1.8kmに位置する佐貫上台遺跡（24）では、12世紀の土坑６基、溝状遺構などが検出され、土師質土器を中心に白磁、青磁など、中世の遺物が多数出土している。

前田遺跡からは、室町時代の屋敷跡と井戸２基が検出され、備前、瀬戸、青磁、白磁などの陶磁器が出土している。また、井戸からは病気平癒のまじないに使われた呪符や舟形木製品が出土している。

註１　河原町教育委員会中道秀俊氏の御教示による。

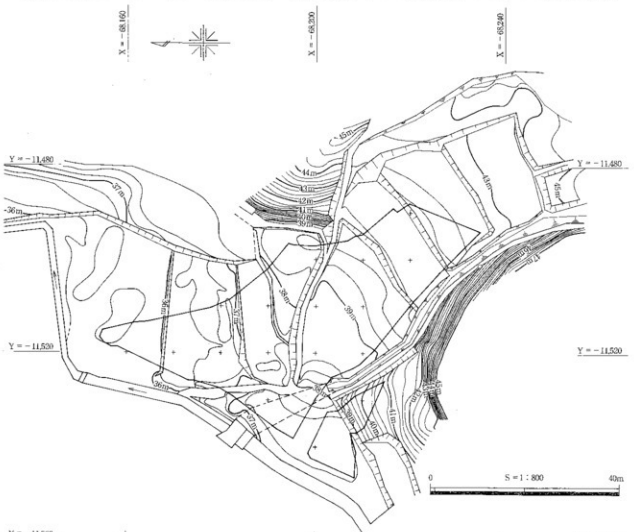
参考文献　『河原町誌』河原町誌編集委員会　1986
『前田遺跡発掘調査報告書』河原町教育委員会　1983
『郷原遺跡発掘調査報告書』河原町教育委員会　1986
『佐貫上台遺跡』鳥取県教育文化財団　2000
『縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター　1989
『弥生時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター　1989
『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター　1989
『鳥取県の歴史』内藤正中、真田廣幸、日置粂左ヱ門　1997　山川出版社
『鳥取県地名大辞典』豊島吉則、松田晃幸、中林保、亀井照人、井上寛司　1982　角川書店

第３章　調査の概要

第１節　調査の概要と基本層序（第５～８図、写真図版１、２）

１区では、表土剥ぎの際調査区外周にミニユンボで排水溝を掘削し、排水溝の壁面（調査区の法面）と、やや西側に設定した南北方向のベルトの土層断面を観察し、掘り下げの指針とした。１区の調査前の状況は田圃であり、圃場整備が行われている。調査区北側1/3及び南側1/3ほどの範囲は、圃場整備に伴う掘削、造成で大きく撹乱を受けているものと思われ、東側も従来緩やかな斜面地だったものが削平されたと考えられる。

１区中央付近の基本層序は、上から順に黒灰褐色系、茶灰褐色系、灰茶褐色系の土の堆積からなる。黒灰褐色系の土（第７－２図①層）は調査区のＣ３～Ｄ３グリッド付近に広がっており、土師質土器を中心とした中世の遺物を包含する。本来的には広汎に堆積していた可能性もあるが、現状では15m四方ほどの範囲に広がるに留まっている。黒灰褐色系の土の下には茶灰褐色系の土（第７－１図②③層、７－２図④⑤⑥層）が堆積している。調査区の西側を広汎に覆い、20～30cm前後の厚みを持つ。この層の上面で溝状遺構、掘立柱建物跡、ピット群などの遺構を検出した。土層中には弥生土器、須恵器などの幅広い時期にわたる土器片を包含する。この遺構面は調査区北側のグリッドのＣライン付近で途切れているが、後世田圃の境界線に沿って掘削が行われた結果、北側の遺構面が破壊されたものと考える。茶灰褐色系の遺物包含層の下には灰茶褐色系の土（第７－１図①④⑥層、



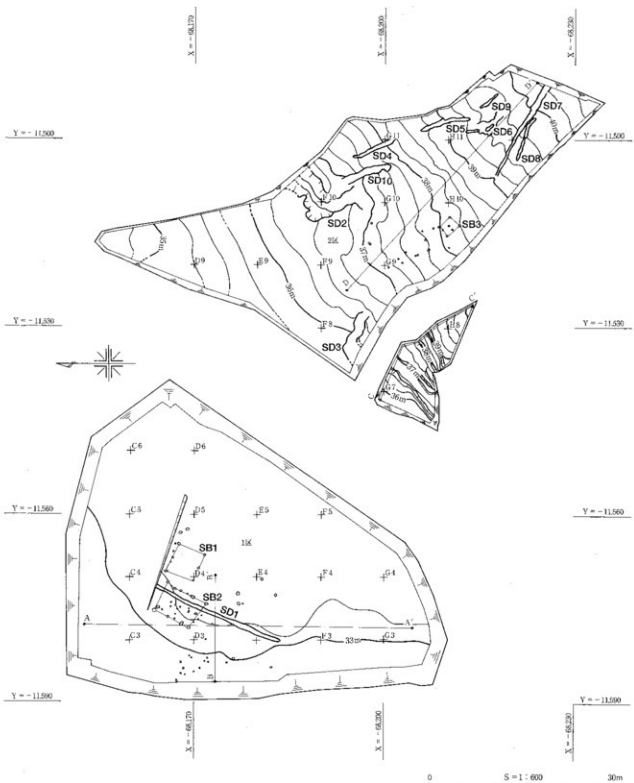
第５図　２区調査前地形測量図

7－2図⑩層）が堆積しているが、この層より下層では遺構、遺物とも確認されなかった。

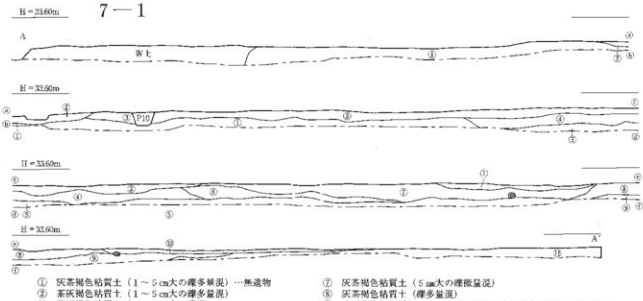
調査区の南側は茶灰褐色系の遺物包含層が10cm程度の厚みでわずかに広がる。この包含層の下には、遺物を含まない灰茶褐色系の礫層（第7－1図⑧層）が厚く堆積している。

調査区の東側は、表土を除去するとすぐに、茶灰褐色系でこぶし大～人頭大ほどもある大礫を多量に含む層があらわれる。この層は調査区中央付近で灰茶褐色土層の下へ潜り込んでゆく。遺物、遺構ともこの面では確認されていない。1区から検出された遺構は溝状遺構1条、掘立柱建物跡2棟、ピット70基である。

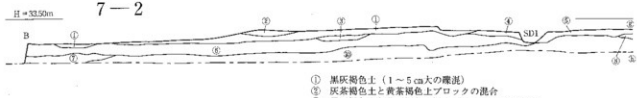
1区と2区との間は、農道と農業用水路によって分断されている。2区の西端の標高は35.5m前後、1区の東

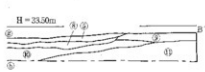


第6図　全体遺構実測図

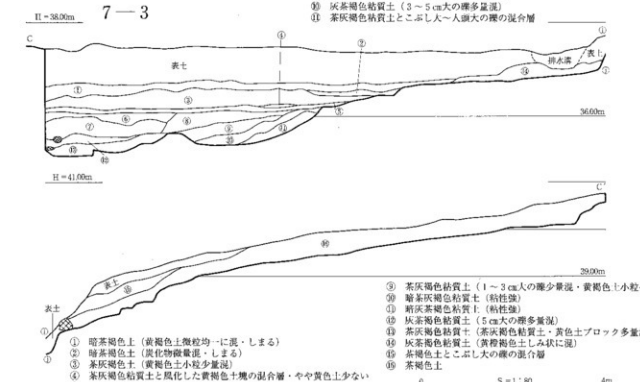


① 灰茶褐色粘質土（1～5㎝大の礫多量混）…無遺物
② 茶灰褐色粘質土（1～5㎝大の礫多量混）
③ 茶灰褐色粘質土（1～5㎝大の礫混）
④ 灰茶褐色粘質土（5㎜～1㎝大の礫および炭化物微量混）
⑤ 青灰茶褐色粘質土（1～5㎝大の礫多量混）…無遺物
⑥ 灰茶褐色粘質土（3㎝～こぶし大の礫混）
⑦ 灰茶褐色粘質土（5㎝大の礫微量混）
⑧ 灰茶褐色粘質土（礫多量混）
⑨ 暗灰茶褐色粘質土（1～5㎝、こぶし大の礫多量混）…無遺物
⑩ 灰茶褐色粘質土（1㎝大の小礫多量混）
⑪ 暗灰茶褐色粘質土とこぶし大～人頭大の礫の混合…無遺物





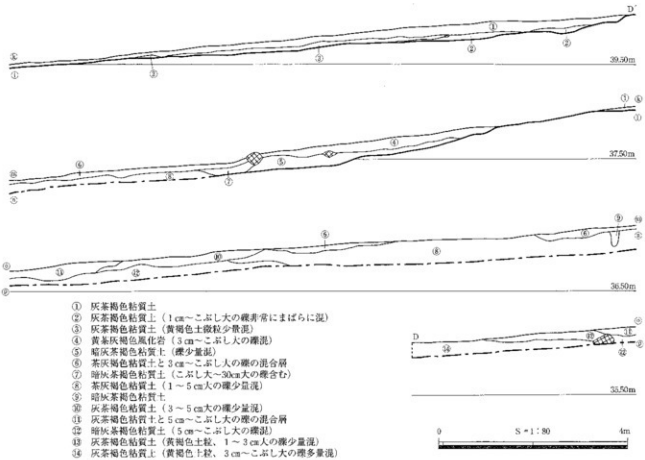
① 黒灰褐色土（1～5㎝大の礫混）
② 灰茶褐色土と黄茶褐色土ブロックの混合
③ 黒灰褐色土と茶灰褐色の混合（1～5㎝大の礫混）
④ 茶灰褐色粘質土（1㎝大の礫、黄褐色土粒少量混）
⑤ 茶灰褐色粘質土（1㎝大の礫小袋混）
⑥ 茶灰褐色粘質土（5㎜～1㎝大の礫、黄褐色土粒混）
⑦ 灰茶褐色粘質土（1㎝大の礫微量混）
⑧ 茶灰褐色粘質土（3～5㎝大の礫多量混）
⑨ 茶灰褐色粘質土と1～3㎝大の礫の混合層
⑩ 灰茶褐色粘質土（3～5㎝大の礫多量混）
⑪ 茶灰褐色粘質土とこぶし大～人頭大の礫の混合層



① 暗茶褐色土（黄褐色土微粒均一に混・しまる）
② 暗茶褐色土（炭化物微量混・しまる）
③ 茶灰褐色土（黄褐色土小粒少量混）
④ 茶灰褐色粘質土と風化した黄褐色土塊の混合層・やや黄色土少ない
⑤ 茶灰褐色粘質土と風化した黄褐色土塊の混合層
⑥ 茶灰褐色粘質土（1～3㎝大の礫少量混）
⑦ 茶灰褐色粘質土（1～3㎝大の礫・黄褐色土小粒多量混）
⑧ 茶灰褐色粘質土（1～3㎝大の礫少量混・黄褐色土小粒多量混）
⑨ 茶灰褐色粘質土（1～3㎝大の礫少量混・黄褐色土小粒少量混）
⑩ 暗茶灰褐色粘質土（粘性強）
⑪ 暗灰茶褐色粘質土（粘性強）
⑫ 灰茶褐色粘質土（5㎝大の礫多量混）
⑬ 茶灰褐色粘質土（茶灰褐色粘質土・黄色土ブロック多量混）
⑭ 灰茶褐色粘質土（黄褐褐色土しみ状に混）
⑮ 基礎色土とこぶし大の礫の混合層
⑯ 茶褐色土

S＝1：80　0　4m

第７図　１区、２Ａ区土層断面図



第8図　2B区土層断面図

端の標高が33.25mであり、比高差は約2m、その間の距離は17mである。2区の調査前の状況は畑地と山林で、調査区南寄りの山裾に沿って流路が存在した。調査に際し、この流路をコルゲート管で補強し、排水に利用した。流路を境に、2区をA、B区に2分割し、調査を進めていった。

2A区は、従来緩やかな斜面だったところを開墾、植林に伴い大きくL字状に掘削したことが窺われ、段状の地形をなす。2A区南東側半分ほどの範囲は、遺跡の南側にそびえる山から連なる尾根の裾に当たり、比較的急峻な斜面である。西側半分は平坦面で、南東端と北西端の比高差は約4mである。斜面中腹にテラス状の地形が確認されたが、埋土中の混入物などから現代に掘削されたものと判断した。斜面地には50cm前後の厚みで茶褐色土が堆積している。茶褐色土を除去すると、風化した黄茶褐色の岩盤が現れる。この岩盤は途中で大きく掘削されながらも平坦面まで続いているが、平坦面の西側付近で不自然にえぐられたような格好で途切れてしまう。平坦面の岩盤の上には灰茶褐色系、茶灰褐色系の礫を含む土が堆積しており、第7－3図⑤層及び⑨層では弥生土器片、土師器片などを検出している。いずれも混入したものと思われ、遺構も岩盤上では検出されていない。

2B区は全体に緩やかな斜面地である。遺構検出面の南東側の標高は40.5m、北西側の標高は35mで、比高差は約6mある。調査前は小規模な畑地であり、以前は水田も営まれていたという。畑の区画に伴う段状の地形が随所に見られ、所々撹乱も受けていた。

標高39～40m付近には、遺物を僅かに含む灰茶褐色系の粘質土（第8図①～③層）が20～40cmの厚さで堆積している。この層を除去すると黄橙褐色系の風化した岩盤が現れる。岩盤は2B区中央付近で途切れるが、かわって小礫を多量に含む茶灰褐色粘質土（第8図⑥⑧層）が西北側に広がる。この岩盤と茶灰褐色粘質土の上に溝状遺構、ピット群などの遺構が築かれている。茶灰褐色粘質土は遺物を包含せず、これより下層で遺物、遺構は確認されなかった。2B区では南東から北西方向へ向かう狭長の溝状遺構7条、弧を描く幅広の溝状遺構2条、掘立柱建物跡1棟、ピット25基を確認した。

第４章　調査の成果

第１節　溝状遺構

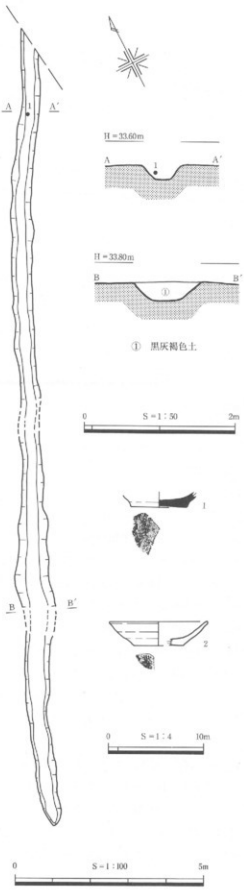
ＳＤ１（第９図、写真図版３）

１区Ｃ３～Ｅ３グリッドにかけて位置する。標高33.2m付近の平坦面上を南西～北東方向に向かい直線的に走る。Ｃ３グリッド北東付近で客土層に切られる形で途切れる。検出できた範囲での規模は、長さ21.5m、検出面での幅50～90cm、底面幅20～50cm、深さ20cm前後を測り、断面形は逆台形を呈する。溝の底面の標高は32.6m前後であり、南西端、北東端ともほぼ同じレベルであることから、均一の深さを意識して作られたことが窺える。埋土は黒灰褐色土の単層で、埋土中より須恵器の皿（１）と土師質土器の皿（２）を検出している。（２）の体部は中位で緩やかに屈曲する。（１、２）とも、内外面回転ヨコナデ調整で、底部には回転糸切痕が見られる。

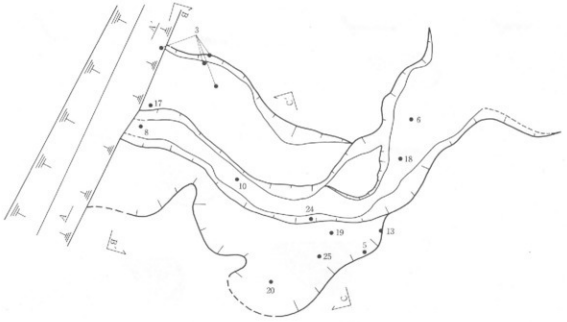
ＳＤ１は、掘立柱建物跡ＳＢ１、２と近接することから、建造物に伴う区画、あるいは排水溝として機能したものと推測する。遺構の時期は、出土遺物より12世紀以降と考える。

ＳＤ２（第10、11図、写真図版５、６、14）

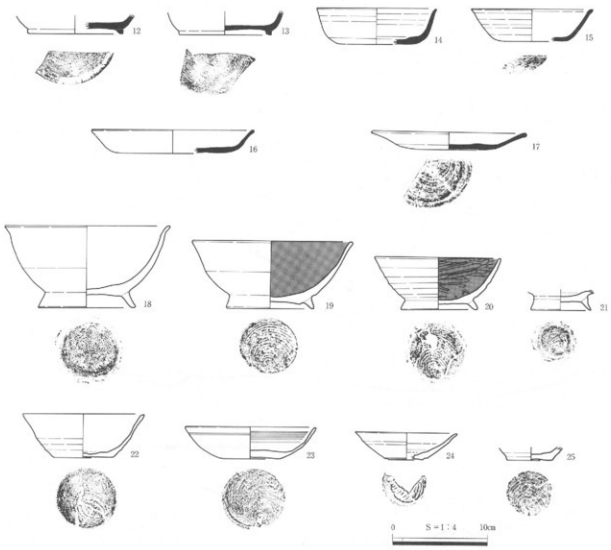
２区Ｅ９～10、Ｆ９～10グリッドの標高36.8m付近から36.5m付近に位置する。南から北西方向に向かって緩やかに下りながら５mほど伸びたのち、Ｆ10杭付近で北東方向に屈曲する。北東方向に向かって６mほど伸びたところで調査区の北東壁とぶつかる。調査区外に続いているため全貌は明らかでないが、検出した範囲内での規模は長さ11m、検出面での最大幅は約５m、最小幅で1.7m、底面の最大幅２m、最小幅50cm、深さは南側で30cm前後、北東端の最深部で80cmを測る。南端の底面の標高は36.5m、北東端の底面の標高は35.8mで、比高差は約70cmあり、南側から北東側へ向かう流れが想定できる。南東端では非常に浅くなり、「ハ」の字状に広がって途切れるが、調査前、畑作に伴う段状の地形が認められた部分でもあり、後世削平を受けている可能性が高い。断面形は南側がやや幅広で浅い逆台形であり、屈曲してから北東方向へ向かう部分では、検出面での幅は２m前後に広がり、底面幅は50cm前後と極端に狭まる漏斗状の形態となる。埋土は主に灰茶褐色系の土からなり、３cm～こぶし大ほどの大きさの礫を多量に含む灰茶褐色砂混じり粘質土が、溝の大半を占めている。この層は、ローリングをあまり受けていない土器片を



第９図　ＳＤ１及び出土遺物



第10図　ＳＤ２及び出土遺物（１）

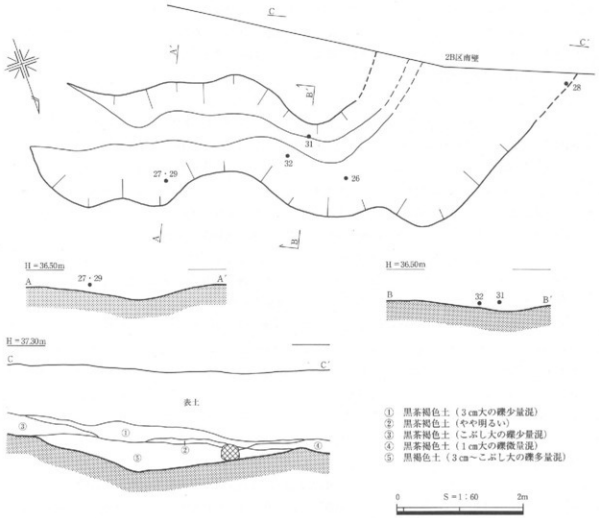


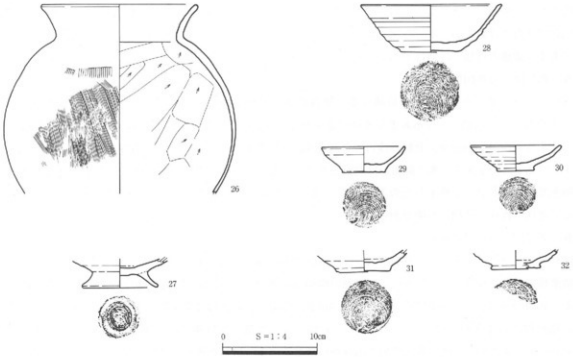
第11図　ＳＤ２出土遺物（２）

多量に包含しており、強い流れによって溝が短期間のうちに一気に埋まったことを窺わせる。

遺物は須恵器、土師質土器等を検出している。（３）は須恵器の坏身である。口縁端部は鈍い段を有し、底部1/3程度はヘラケズリ調整である。陶邑のＴＫ10並行と考えられ、６世紀中頃に位置付けられる。（４）は須恵器の坏蓋である。口縁端部は丸くおさめ、口縁部と天井部の境には凹線が巡る。内外面とも回転ナデ調整である。（５）は須恵器の蓋である。口縁端部は屈曲したのち外反し、突出する。（６、７）は須恵器の高坏の脚部である。（８～11）は須恵器の甕である。甕はいずれも頸部が短い。（12～15）は須恵器の坏である。（12、13）は底部に高台を持つものである。（14、15）は平坦な底部で、直線的に斜め上方へ立ち上がる体部である。口縁端部は丸くおさめられ、やや外反気味になる。（12、13、15）は底部に回転糸切痕が見られる。（16、17）は須恵器の皿である。平坦な底部から直線的に斜め上方へ立ち上がる体部を持ち、口縁端部はまるくおさめられる。底部には回転糸切痕が残る。

（18）は土師質土器の椀である。器高は高く、内湾する体部で、口縁端部はわずかに外反する。底部には「ハ」の字状に広がる高台がつき、回転糸切痕が残る。（19、20）は黒色土器の椀である。（19、20）とも内湾する体部に断面三角形の低い高台がつく。（20）の内面には横方向の粗いミガキが見られる。（22）は土師質土器の坏である。平坦な底部からほぼ直線的に立ち上がる体部を有する。（23）は土師質土器の皿である。平坦な底部から内湾気味に立ち上がる体部を有し、口縁から１cmほど下位には外面１条、内面に６条の沈線が巡る。（24、25）も





第12図　ＳＤ３及び出土遺物

土師質土器の皿である。底径は小さく、直線的に斜め上方へ広がる体部を持つ。底部には回転糸切痕がみられるが、切り離しはやや粗雑である。(14～25) は10世紀頃の遺物である。これらの出土遺物が直接的に遺構の構築及び使用時期を示すとは言い難いが、概ね遺構の時期は10世紀以降と考えられる。

ＳＤ３（第12図、写真図版６、７、14）

２Ｂ区Ｆ７～８グリッドにかけて位置する。標高36.4mから35.8m付近を緩やかに北西方向に向かって６mほど下り、Ｆ７グリッド中央付近で南西方向に屈曲する。屈曲したのちは、南西方向に1.5mほど伸びたところで調査区の壁面とぶつかり途切れる。水路を挟んだ２Ａ区側では、溝の続きは検出されなかった。

検出できた範囲での規模は、長さ７m、検出面での幅1.6m前後、底面幅20～50cm前後、深さは東端の浅いところで10～20cm、南側の最深部で50cmを測る。断面形は浅い皿状である。東端の底面の標高は36.4m、南端の底面の標高は35.7mで、比高差は約65cmあり、東から南方向に向かう流れが想定される。なお、溝の左岸部分は表土剥ぎ時、土層観察のためのトレンチを重機で掘削した際に、本来の検出面を20cmほど削平してしまっている。埋土は、３cmからこぶし大の礫を多量に含む黒褐色系の土を主体とする。埋土中にはローリングをほとんど受けていない状態の土器片が少量ながら混在しており、急激な流れが礫や土器を一気に押し流した様子が窺える。遺物は土師器、土師質土器が出土している。(26) は土師器の甕である。外反する口縁に球形の体部を有するもので、体部内面は頸部以下にケズリ、外面肩部以下にハケメ調整が施される。(27) は土師質土器の坏の底部である。「ハ」の字状に広がる高台がつき、回転糸切痕が残る。10世紀頃のものと考えられる。(28) は土師質土器の坏である。平坦な底部から直線的に斜め上方に伸びる体部を有し、底部には回転糸切痕が見られる。(29～31) は土師質土器の皿である。底径は小さく、(29、30) は体部中位でわずかに屈曲する器形である。底部にはいずれも回転糸切痕が残る。(28～32) は12世紀頃の遺物である。出土遺物から、遺構の時期は12世紀以降と考えられる。性格は不明だが、形態や埋土の状況から判断して自然流路である可能性が高い。

ＳＤ４（第13図、写真図版７、８）

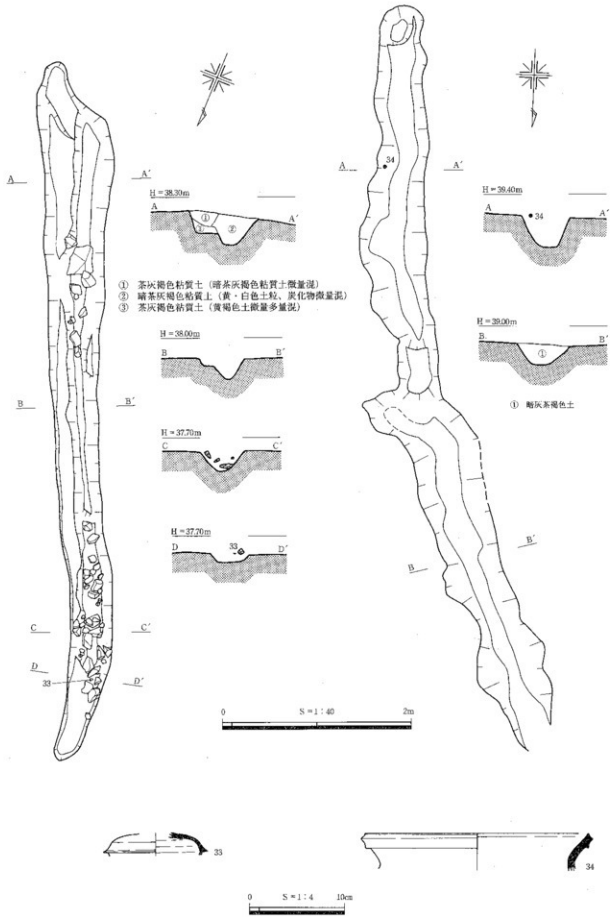
２Ｂ区Ｆ10～Ｇ10グリッドにかけて位置する。標高38.2～37.5m付近を南東から北西方向に向かい、直線的に伸びる。溝の断面形は基本的に逆台形であり、東側には浅いテラス状の段が付随する。検出した範囲内では、南側が深く北側が浅い傾向にある。規模は長さ7.4m、検出面の幅は南東側で80cm前後、北西側で40cm前後、底面幅は20cm前後、テラス状平坦面の幅15cm前後、深さは南東側で30cm、北西側で10cmを測る。溝の中央よりやや南寄りの部分及び北寄り部分では、底面付近及び底面よりわずかに浮いたところで、こぶし大～人頭大の礫が集中して検出された。埋土はしまりのある暗茶灰褐色粘質土を主体とする。埋土中からは須恵器片を数点検出しているが、図化できたのは蓋 (33) １点のみである。(33) は天井部とかえりの端部を欠く。調整は内外面とも回転横ナデである。遺構の性格・時期は不明である。

ＳＤ５（第14図、写真図版８、９）

２Ｂ区Ｇ11～Ｈ11グリッドにかけて位置する。標高39.3～39.0m付近までは南から北へ直線的に４mほど走り、その後北西方向に屈曲し、４mあまり伸びて途切れる。規模は長さ7.4m、検出面の幅50～70cm、底面幅25cm前後、深さは南側で30cm前後、北側の浅いところで20cm前後を測る。底面の標高は南側で39.0m、北側で38.4mであり、比高差は60cmある。溝の断面形は逆台形を呈し、埋土は暗灰茶褐色土の単層からなる。遺物は埋土上層から須恵器の甕片 (34) を検出したのみである。(34) は外反する口縁で、端面には稜が入り、断面三角形状を呈する。遺構の性格、時期は不明である。

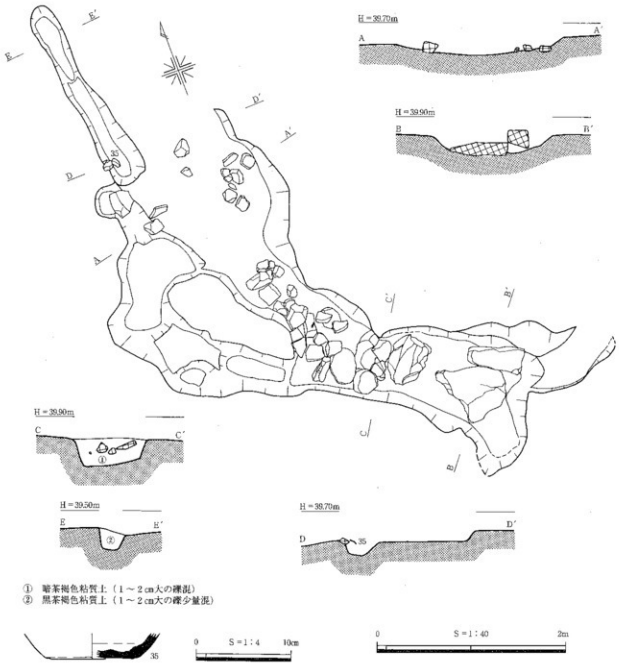
ＳＤ６（第15図、写真図版９）

２Ｂ区Ｈ11グリッドに位置する。標高39.7～39.3m付近を南東から北へ向かい、「く」の字状に屈曲する不整形な溝状遺構である。規模は長さ約８m、検出面の幅80cm前後（最大幅２m）、底面の幅50cm前後、深さは15～30cmを測る。底面のレベルは、南東側、北側とも39.4m前後である。断面形は基本的に逆台形を呈するが、北端に近付くに連れ段差は不明瞭になり、浅く広がって途切れる。北端の左肩側には、底面付近からさらに長さ2.1m、幅30cm前後、深さ20cm程度の溝状の掘り込みが付随している。屈曲をみせる溝の中央付近には、中洲状に小



第13図　ＳＤ４及び出土遺物

第14図　ＳＤ５及び出土遺物

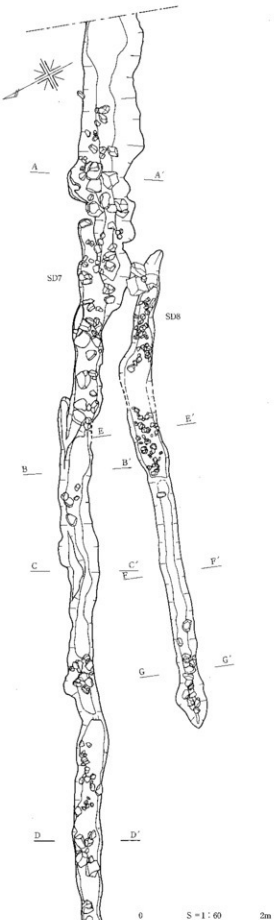


第15図　ＳＤ６及び出土遺物

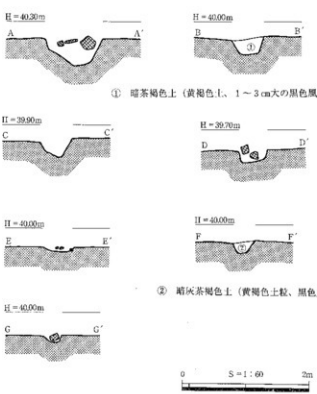
さな高まりが残る。溝の中央付近から南東側にかけての埋土中には、一片20～80cmもの大きさの礫が密集している。北側に向かうに連れ、混入している礫の大きさははこぶし大ほどの小さなものに変わり、密度も薄くなっていくようである。埋土は１～２cm大の礫を少量含む黒茶褐色粘質土の単層からなる。遺物は須恵器の坏蓋片、甕片、土師質土器片などがわずかに出土している。そのうち図化できたのは須恵器底部(35)である。壺の底部か。外面は回転ヨコナデ調整で、底部はヘラ切り後ナデ、内面は非常に粗雑で同転ヘラケズリの粗い痕跡が残る。遺構の性格は不明であり、時期も断定し難い。

ＳＤ７（第16図、写真図版10、11）

２Ｂ区Ｈ10～Ｉ11グリッドにかけて位置する。標高40.3mから39.0m付近を南東から北西方向へ向かい直線的に走る。南東側は調査区外へ続いており全貌は明らかでないが、検出できた範囲での規模は長さ16.5m、検出面



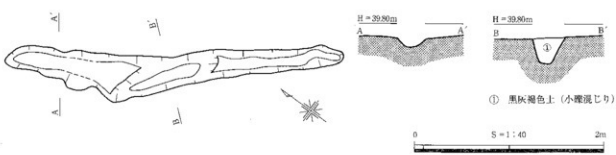
第16図　SD7、8



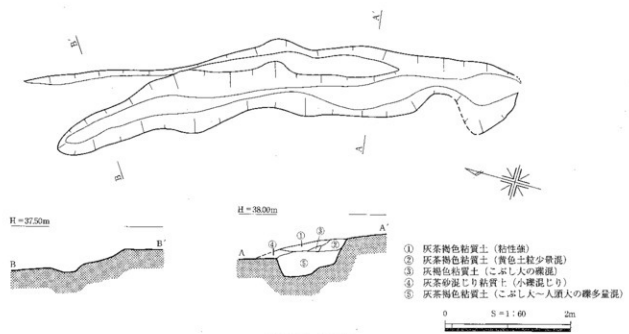
での幅は南東側で90cm、北西側で40cm、底面幅は30cm前後、深さは南東側で40～50cm、北西側で20cm前後を測る。底面の標高は南東端が39.7m、北西端が39.0mであり、比高差は約70cmである。断面形は主に逆台形を呈し、埋土は暗灰茶褐色土の単層からなる。遺構の肩及び底面付近からは、こぶし大～人頭大ほどの礫を多量に検出した。南東側ほど礫は大きく集中度も密であり、北西側では礫の出方はまばらになる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SD8（第16図、写真図版10、11）

2B区I10～11グリッドにかけて位置する。標高39.9～39.6m付近を南東から北西方向へ向かって直線的に走る。枝分かれするような形でSD7と併走している。規模は長さ7.7m、検出面での幅40～50cm、底面幅20～40cm、深さは南東側の浅いところで5cm前後、北西側で15cm前後を測る。底面の標高は南東側が39.8m、北西側では39.5mで、比高差は約40cmある。断面形は逆台形で、埋土は暗灰茶褐色土の単層である。溝の北西側にはこぶし大ほどの礫が集中しており、中央より東側半分には5cm大ほどの小礫が溝の底面からやや浮いたところにびっしりと張り付くような格好で集中する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第17図　ＳＤ９



第18図　ＳＤ10

ＳＤ９（第17図、写真図版11）

２Ｂ区Ｈ11グリッドに位置する。標高39.5～39.7m付近を南東から北西方向に向かい直線的に走る。規模は長さ3.6m、検出面の幅30～50cm、底面幅20cm前後、深さは中央付近で25cm、両端付近では10cm前後を測る。南東端と北西端の比高差は10cm程度であり、中央付近は一段深く掘り込まれている。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒灰褐色土の単層である。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

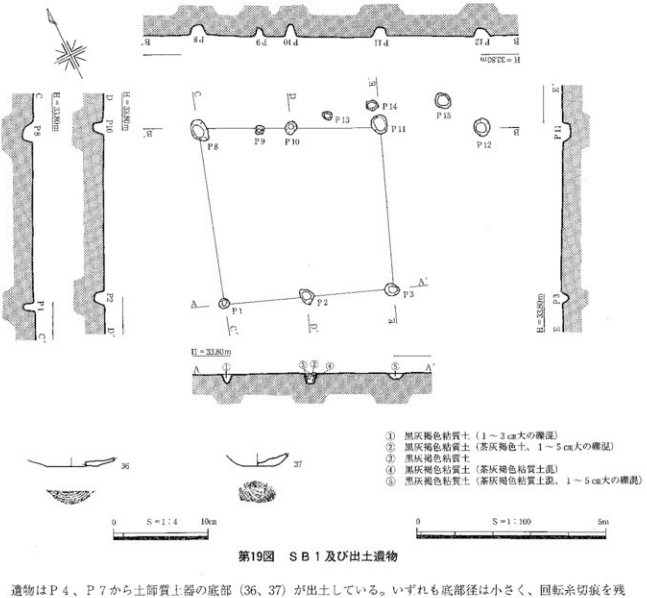
ＳＤ10（第18図）

２Ｂ区Ｆ10～Ｇ10グリッドにかけて位置する。標高37.7mから37.0m付近を南東から北西方向に向かい、緩やかに湾曲しながら伸びる。規模は長さ3.9m、検出面の幅60cm前後、底面幅15cm前後、深さは南側の最も深いところで60cm前後を測る。東側は幅20～30cm前後の狭長なテラス状平坦面が付随する。断面は基本的に逆台形を呈し、埋土は灰茶褐色系の土からなる。遺物は出土しておらず、時期、性格とも不明である。

第２節　掘立柱建物跡

ＳＢ１（第19図、写真図版３）

１区中央付近、Ｃ３、Ｃ４～Ｄ４グリッドにかけて、標高33.3m前後の平坦面上に位置する。検出できた範囲での規模は桁行１間（4.4m）×梁行２間（4.6m）を測る。柱穴の規模はＰ１（25×23－26）cm、Ｐ２（41×31－28）cm、Ｐ３（39×30－17）cm、Ｐ４（54×44－28）cm、Ｐ５（24×22－21）cm、Ｐ６（34×31－30）cm、Ｐ７（51×40－23）cmを測り、各柱穴間距離はＰ１－Ｐ２間2.2m、Ｐ２－Ｐ３間2.2m、Ｐ３－Ｐ７間4.4m、Ｐ４－Ｐ５間1.6m、Ｐ６－Ｐ７間0.8m、Ｐ４－Ｐ１間4.6mである。柱穴の埋土は、黒灰褐色系の土からなる。



第19図　ＳＢ１及び出土遺物

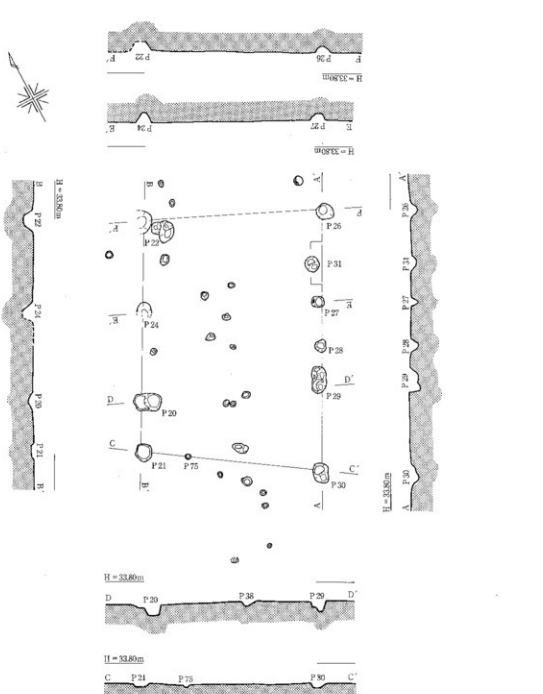
遺物はＰ４、Ｐ７から土師質土器の底部（36、37）が出土している。いずれも底部径は小さく、回転糸切痕を残す。(36）はやや開き気味に体部が横方向へ伸びていくのに対し、(37）は内湾気味に立ち上がる体部を持つ。調整は（36、37）とも内外面回転ヨコナデである。出土遺物より、時期は12世紀以降と考えられる。

ＳＢ２（第20図、写真図版３）

１区Ｃ３～Ｄ３グリッドにかかる、標高33.2m前後の平坦面上に位置する。検出できた範囲での規模は、梁行１間（4.8m）×桁行３間（7.0m）を測る。柱穴の規模はＰ８（60※×30※－26）cm（※は遺存値）、Ｐ９（40※×29※－28）cm、Ｐ10（71×44－32）cm、Ｐ11（46×40－８）cm、Ｐ12（46×43－20）cm、Ｐ13（40×39－18）、Ｐ14（35×31－20）cm、Ｐ15（32×32－23）cm、Ｐ16（70×36－30）cm、Ｐ17（59×44－21）cmを測り、各柱穴間距離はＰ８―Ｐ９間で2.5m、Ｐ９―Ｐ10間で2.4m、Ｐ10―Ｐ11間で1.3m、Ｐ11―17間で4.8m、Ｐ12―Ｐ13間で1.5m、Ｐ13―Ｐ14間で1.0m、Ｐ14―Ｐ15間で1.2m、Ｐ15―Ｐ16間で1.0m、Ｐ16―Ｐ17間で2.5m、Ｐ８―Ｐ12間で4.8mを測る。埋土は黒灰褐色系の土からなり、いずれも単層であった。遺物はＰ９から土師質土器の皿の底部（39）、Ｐ13から土師質土器の口縁部（38）が出土している。(38）は内湾気味に立ち上がる体部で、口縁端部は外反する。(39）は回転糸切痕を残す底部で、体部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも回転ヨコナデ調整である。出土遺物から、時期は12世紀以降と考える。

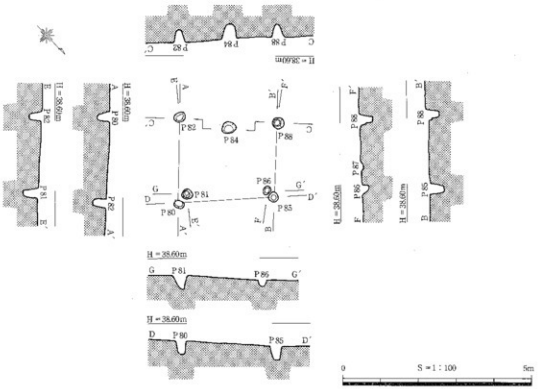
ＳＢ３（第21図）

２区Ｈ９～Ｉ９グリッドにかかる、標高38～38.2mの緩斜面上に位置する。規模は、梁行１間（2.5m）×桁



第20図　ＳＢ２及び出土遺物

行１間（2.3m）を測る。柱穴の規模はＰ19（28×25−34）㎝、Ｐ21（29×27−37）㎝、Ｐ22（27×20−38）Ｐ23（27×26−38）を測り、各柱穴間距離はＰ19—21間で2.5m、Ｐ21—23間で2.0m、Ｐ22—23間で2.5m、Ｐ19—22間で2.3mを測る。いずれの柱穴も、堀土は礫を少量含む暗灰茶褐色粘質土の単層からなる。遺物はＰ21から須



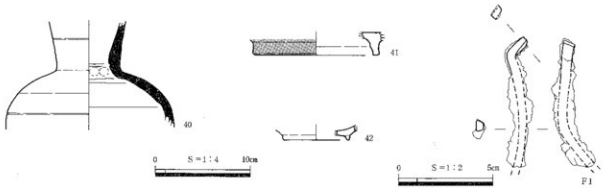
第21図　ＳＢ３

恵器片、Ｐ22、24から土器片が出土しているが、いずれも図化できなかった。

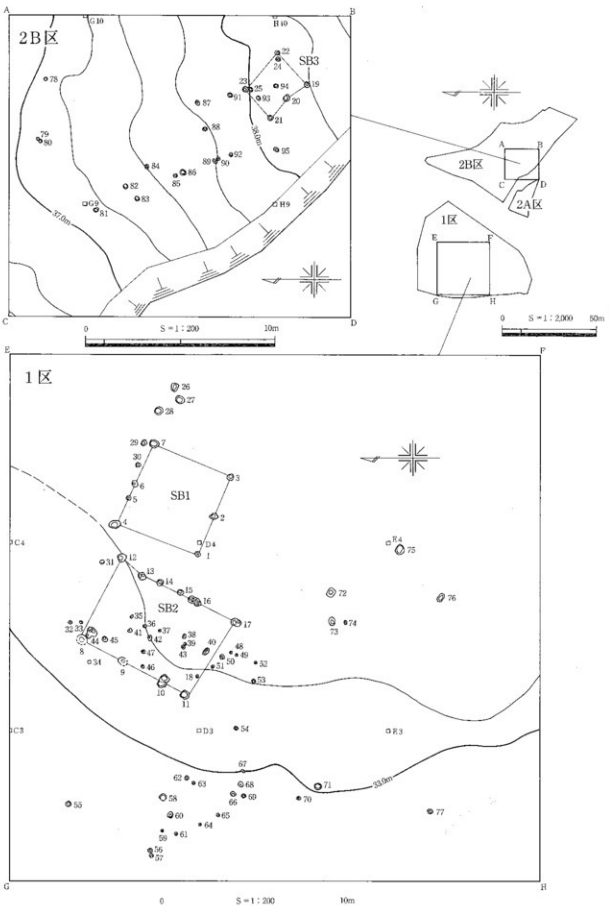
第３節　ピット群、ピット内出土遺物（第22、23図、写真図版15）

高福大将軍遺跡ではピットを95基検出した。ピットは１区Ｃ２～Ｃ４、Ｄ２～Ｄ４グリッド付近、２Ｂ区はＧ９グリッド付近に集中して存在している。ピット群の中から３棟の掘立柱建物跡を確認したが、その他大多数のピットに関しては、位置関係に規則性を見出せなかった。各ピットの位置は第23図に、各規模は表２・ピット一覧表に示している。

Ｐ35、Ｐ55、Ｐ56、Ｐ87の埋土中からは遺物（40～42、Ｆ１）が出土している。Ｐ35から出土した（42）は土師質土器の底部である。風化が著しいが高台が付き、底部にはわずかながら回転糸切痕が見える。Ｐ55から出土した（40）は須恵器の壺である。頸部は直線的だが上方に向かってわずかに開き気味になる。頸部、肩部の外面にはそれぞれ一条ずつ弱い沈線が巡る。調整は内外面とも回転ヨコナデで、肩部から頸部にかけては指頭圧痕が見られる。Ｐ56から出土した（41）は土師器の底部である。底面は平らで、わずかに「ハ」の字状に広がる厚みのある高台が付く。内外面に赤色塗彩が施されている。Ｐ87からは鉄製品（Ｆ１）が出土している。上端が「く」の字状に屈曲しており、釘か鎹の可能性を考える。



第22図　ピット内出土遺物



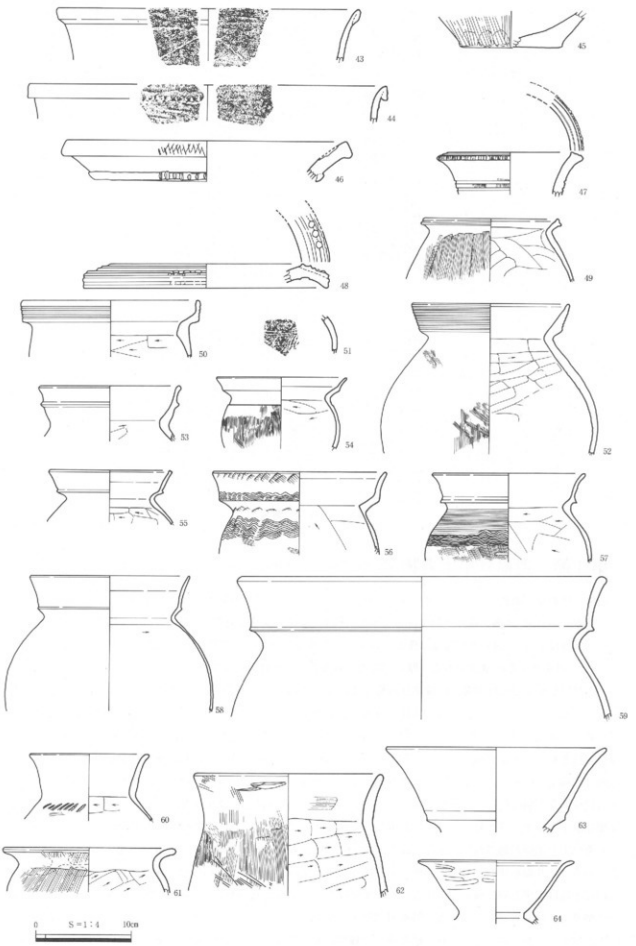
第23図　ピット位置図

新ピットNo	旧ピットNo	規模：長軸×短軸−深さ(cm)	遺構名	出土遺物	新ピットNo	旧ピットNo	規模：長軸×短軸−深さ(cm)	遺構名	出土遺物
P 1	P 1	25.0×23.0−26.3	SB1		P49	P64	14.5×12.5−13.7		
P 2	P 2	41.0×31.0−27.6	SB1	土器片	P50	P62	29.0×22.0−21.5		
P 3	P 3	39.0×30.0−16.5	SB1		P51	P61	15.0×15.0−13.5		
P 4	P 8	54.0×44.0−28.4	SB1	土師質土器・皿	P52	P74	12.0×10.5−8.4		
P 5	P 9	23.5×21.5−21.0	SB1	土器片	P53	P56	16.0（残存）×16.0−23.0		
P 6	P10	34.0×31.0−30.1	SB1	須恵器片	P54	P47	18.0×17.0−17.8		
P 7	P11	51.0×40.0−23.2	SB1	土師質土器・皿	P55	P73	26.0×23.0−22.0		須恵器・壺、甕片
P 8	P22	60.0(残存)×30.0(残存)−25.7	SB2	須恵器、土師質土器	P56	P58	24.0×19.0−13.0		土器片
P 9	P24	40.0(残存)×28.5(残存)−28.1	SB2	土師質土器・皿	P57	P57	20.0×20.0−12.9		
P10	P20・25	71.0×44.0−34.9	SB2	甕口縁	P58	P59	36.0×34.0−21.6		土師質土器・坏
P11	P21	46.0×40.0−8.4	SB2		P59	P55	11.0×9.0−14.3		
P12	P26	46.0×43.0−19.9	SB2		P60	P49	31.0×24.5−28.3		
P13	P31	40.0×39.0−18.2	SB2	土師質土器・坏	P61	P54	13.0×13.0−16.0		
P14	P27	34.5×31.0−20.0	SB2	土器片	P62	P60	18.5×18.0−16.9		土器片
P15	P28	32.0×31.5−23.4	SB2	土器片	P63	P48	15.0×13.5−25.4		
P16	P29	70.0×35.5−29.7	SB2	土器片	P64	P53	12.5×11.5−15.0		
P17	P30	59.0×43.5−21.3	SB2	須恵器片	P65	P52	17.0×16.0−13.9		
P18	P75	16.0×14.0−8.9	SB2		P66	P46	25.5×22.0−17.6		
P19	P82	28.0×25.0−33.5	SB3	土器片	P67	P45	13.0×13.0−18.8		
P20	P84	37.5×32.0−39.5	SB3		P68	P44	24.0×22.0−24.6		
P21	P88	29.0×27.0−36.8	SB3	須恵器片	P69	P51	20.5×19.0−19.2		
P22	P80	27.0×20.0−37.5	SB3	土器片	P70	P43	23.0×19.0−14.6		
P23	P85	27.0×26.0−38.0	SB3		P71	P110	34.5×33.0−8.6		
P24	P81	29.0×25.0−40.0	SB3′	甕口縁	P72	P111	46.5×41.0−29.3		
P25	P86	23.0×19.5−17.5	SB3′		P73	P112	45.0×34.0−24.8		
P26	P16	46.0×35.0−24.2			P74	P113	21.0×20.5−27.5		
P27	P12	45.0×39.0−8.4			P75	P114	49.5×45.0−30.9		
P28	P15	41.0×39.0−25.2			P76	P115	44.0×28.0−32.5		
P29	P14	31.0×29.5−10.3		土器片	P77	P116	27.0×23.0−28.7		
P30	P13	24.0×23.0−22.4			P78	P107	16.0×14.5−29.0		土師質土器・皿
P31	P70	25.0×23.0−12.6			P79	P106	17.5×16.0−23.9		
P32	P68	16.0×14.5−11.8			P80	P105	20.0×17.5−13.1		
P33	P69	17.0×14.0−17.3			P81	P104	22.5×20.0−12.4		
P34	P77	19.0×18.0−28.5		土器片	P82	P102	22.0×21.0−16.2		
P35	P35	18.0×14.0−16.0			P83	P103	22.0×20.0−14.1		
P36	P36	20.0×17.0−9.9			P84	P100	21.5×21.0−24.5		須恵器片
P37	P37	13.0×11.0−12.9			P85	P99	17.5×17.0−19.7		
P38	P38	21.0×18.0−12.4		土器片	P86	P96	32.0×30.0−32.9		
P39	P39	15.0×15.0−25.4		土器片	P87	P91	22.0×20.5−38.7		
P40	P41	39.0×23.5−32.5			P88	P92	21.0×18.5−19.5		
P41	P42	22.0×19.5−20.6			P89	P95	23.0×18.0−25.3		鉄製品
P42	P109	27.0×18.5−22.8			P90	P94	14.5×14.0−18.5		
P43	P40	19.0×18.0−25.9		土器片	P91	P90	24.5×22.0−35.2		
P44	P17	60.0×48.0−30.1		土器片	P92	P93	20.5×19.0−35.7		土器片
P45	P18	30.0×23.0−25.7			P93	P87	23.5×23.0−7.3		
P46	P19	18.0×16.5−29.7			P94	P83	23.5×22.5−18.5		
P47	P76	17.0×16.0−9.1			P95	P89	26.0×23.0−34.6		土師器・皿
P48	P63	15.0×14.5−8.8							

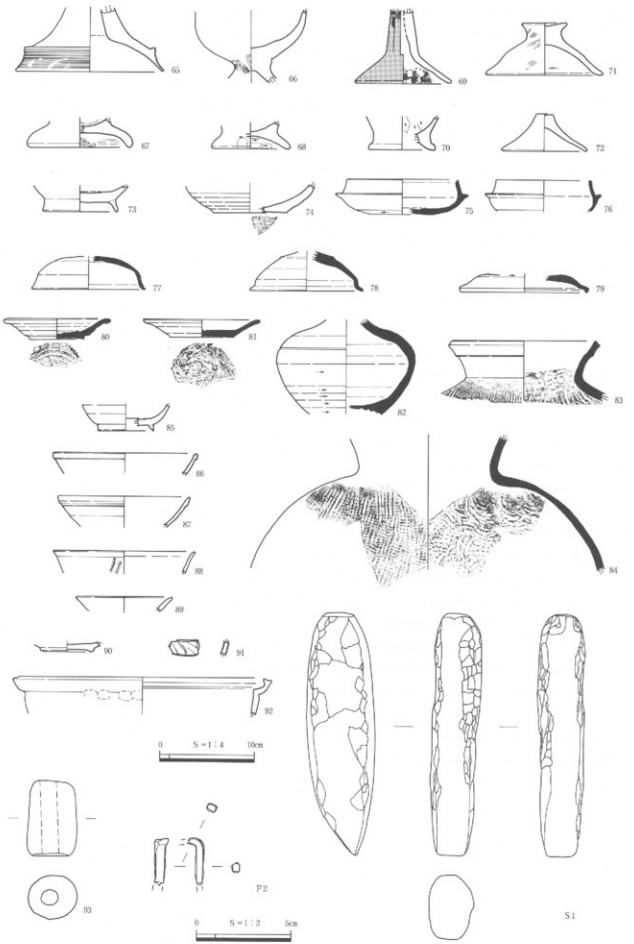
表2　ピット一覧表

第4節　遺構外出土遺物（第24、25図、写真図版15～18）

遺構に伴わない遺物としては、縄文時代後期から近世に至るまで、断続的に出土している。縄文土器は2点出土しており、(43) は縄文時代後期の縁帯文土器、(44) は晩期後葉の突帯文土器である。(43) の口縁部は外面が肥厚し外反する。(44) の口縁部は僅かに外反し、小さな刻目を持つ突帯が口縁端部より垂れ下がるように付く。(45) は弥生土器の底部である。厚い平底で、外面にはハケ目と指頭圧痕が見られる。(46) は弥生土器の壺で、頸部は指頭圧痕貼付突帯、口縁部は斜格子文による装飾が施される。(49) は甕で、口縁部は断面三角形状を呈し、端部はわずかに上方へつまみ出される。口縁外面には2条の凹線が入る。(46、49) は清水編年のⅢ様式と考えられる。(47) は壺である。口頸部はわずかに外反し、口縁端面には2条の沈線が巡り、口縁下端は刻み目が施される。頸部外面には2条の凹線が巡る。(48)も壺の口縁である。口縁端部は拡張され下方へ屈折し、端面は凹線文と円形浮文によって装飾されている。清水編年のⅣ様式に比定されるものである。(50～58) は弥生時代後期～古墳時代初頭の甕である。(50) は直立する複合口縁で、口縁外面は4条の平行沈線が巡る。内面は頸部直下までケズリが見られる。松井編年のⅥ期に比定される。(52) はやや外傾する複合口縁で、口縁外面に8条の平行沈線が施される。胴部の最大径は中位付近にあり、外面は細かいハケ目、内面頸部以下はケズリ調整である。松井編年Ⅶ期と考える。甕 (53) は外反する短い複合口縁で、口縁の屈曲部は緩やかな丸みを持ち、口縁部下端は水平方向に鈍く突出する。内面頸部以下にケズリが見られる。(54) も外反する短い複合口縁を持つ小型甕で、体部は球形を呈する。外面肩部以下には細かいハケ目、内面にはケズリが見られる。(53、54) は但馬地域からの搬入品と考えられ、松井編年のⅧ期に相当する。(56) は外反する複合口縁で、口縁外面上端と



第24図　遺構外出土遺物（１）



第25図　遺構外出土遺物（2）

頸部にはヘラ状工具による刺突文、口縁下端と肩部には波状文が施される。内面は頸部以下までケズリが見られる。松井編年の Ⅷ・Ⅸ期相当か。(55) は複合口縁の上端に平坦面を有し、下端部は水平方向に鈍い突出を見せる。内面は頸部以下にケズリが見られる。松井編年の Ⅷ期に相当する。(57) は口縁部がやや外反する。口縁部上端はわずかに平坦面を有し、下端はやや下方へ向かい鋭く突出する。肩部外面は平行沈線と波状文で飾られ、内面は頸部以下にケズリが見られる。松井編年の Ⅶ～Ⅷ期相当か。(58) の口縁部下端は水平方向へ突出する。器壁は非常に薄い作りであり、松井編年 Ⅶ 期に相当する。(59) は大甕で、外反する複合口縁の上端はやや丸みを帯び、下端はやや下方へ向かい突出する。同じく松井編年の Ⅶ～Ⅷ期相当と思われる。壺 (60) はやや外反する単純口縁を持つ。肩部外面には貝殻腹縁による連続刺突文が施され、内面は肩部以下ヘラケズリが見られる。(61) は土師器の甕で、「く」の字状に外反する口縁を持つ。頸部から肩部外面にはハケメ調整が施され、内面頸部以下にケズリが見られる。(62) は甑で、わずかに外反する口縁にずん胴な体部が続く。外面は頸部以下にハケメが見られ、内面はナナメ、横方向のケズリが顕著である。

(63、64) は鼓形器台の受部である。(64) は口縁部が屈曲し、受部下端は稜を持たない。外面にはミガキがわずかながら見られる。(63) が松井編年 Ⅵ 期、(64) が Ⅶ 期に相当するものと思われる。(65) は器台の脚部である。「ハ」の字状に広がる形態で、複合口縁状の脚台部外面には 8 条の平行沈線が巡る。拡張された脚台部上端は、わずかに上方に突出する。松井編年の Ⅶ 期に比定される。(66、69) は高坏である。(66) の受部は丸みを帯びた椀状を呈し、脚部は「ハ」の字状に広がっていく。(69) の外面は赤色塗彩が施される。(67、68) は低脚坏の脚部で、(67) の脚裾はやや内椀気味になる。(70) は高台風の底部と考え、ここに掲載した。(71、72) は蓋形土器である。「ハ」の字状に裾が広がり、(71) は一旦体部がすぼまった後上端が拡張される。弥生時代後期のものと考えられる。(73、74) は土師質土器の底部である。「ハ」の字状に広がる高台が付き、底部には回転糸切痕がわずかに残る。(74) の体部は内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切痕が残る。11世紀代のものか。(75～84) は須恵器である。(75、76) は坏身で、(75) は口縁端部にわずかに段が残る。(76) は口縁端部に平坦な面を持つ。6 世紀中頃のものか。(77～79) は蓋である。(77、78) は口縁端部が外反する。(79) の天井部は低くなり、口縁端部はやや内側に屈曲する。(80、81) は須恵器の皿である。いずれも大きく外反する体部で、底部には回転糸切痕が残る。(80) の切り離しはやや粗雑である。10世紀代のものと考える。(82) は壺の体部、(83、84) は甕である。(85) は緑釉陶器の小椀である。濃緑色を呈し、有段輪高台が付く。高台部の外面まで施釉されている。近江産のもので、10世紀代に比定される。(86～90) は白磁である。(86、87) は椀で、(86) は小ぶりな玉縁、(87) はやや大きめの扁平な玉縁を有する。大宰府分類の椀 Ⅱ 類にあたる。(88) は口縁部が外反し、外面に櫛目文が施される。大宰府分類の椀 V－2 類である。(89) は皿で、口縁端部が口禿になったものである。大宰府分類の Ⅸ 類にあたる。(90) は皿の底部である。高台は低く、底部は露胎しているが、高台部の外面の一部に釉が垂れた様子が窺える。大宰府分類の皿 Ⅱ 類か。(86～88、90) が11世紀後半から12世紀、(89) が13世紀後半から14世紀初頭に比定される。(91) は青磁である。破片ゆえに器種は不明だが、文様から龍泉窯系と考えられる。12世紀後半から13世紀頃のものか。(92) は瓦質土器の鍋である。口縁部は受口状になり、外面頸部に指頭圧痕が見られる。14世紀頃のものと考える。(93) は円筒状を呈する土錘である。(F 1) は鉄製品で、釘の可能性を考える。(S 1) は柱状片刃石斧である。抉りはなく、断面は長方形を呈する。

表3　出土遺物観察表

（△…復元値、※…遺存値）

遺構名	遺物番号	図版番号	取上番号	種別・器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	色調	焼成	備考	実測者No
SD1	1	9	170	須恵器・底部		※1.5	△5.9	内外面ナデ、底部回転糸切	灰白色	良好		清水33
SD1	2	9	167	土師質土器・皿	△10.4	2.5	△5.2	内外面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		福田や28
SD2	3	10	701・702・703・668	須恵器・坏身	△12.8	5.6		口縁端部に段。底部1/2ヘラケズリ。ヘラ記号有り。	青灰色	良好		清水1
SD2	4	10	792	須恵器・坏蓋	△12.0	※3.4		内外面ヨコナデ	淡青灰色	良好		清水40
SD2	5	10	826	須恵器・蓋	△12.0	※3.3		風化のため調整不明瞭	淡灰白色	やや悪		清水41
SD2	6	10	795	須恵器・高坏		※8.8		内外面回転ヨコナデ	青灰色	良好		清水42
SD2	7	10	753	須恵器・高坏		※4.15	△10.4	内外面ヨコナデ	青灰色	良好		福田や31
SD2	8	10	887	須恵器・甕	△16.6	※4.5		外面口頸部ヨコナデ、頸部～胴部タタキ後カキメ、内面胴部青海波文タタキ	外面灰白色内面赤橙褐色	良好		清水6
SD2	9	10	799・922	須恵器・甕	△16.8	※13.5		口頸部内外面ヨコナデ、肩部以下外面タタキ後ナデ、内面同心円状タタキ	青灰色	良好		福田や19
SD2	10	10	899	須恵器・甕	△23.0	※4.7		内外面ヨコナデ、外面頸部～肩部タタキ後ナデ	淡青灰色	良好		福田や4
SD2	11	10	799・794	須恵器・甕	△16.8	※13.5		内外面ヨコナデ、外面肩部タタキ後ヨコナデ	青灰色	良好		福田や5
SD2	12	11	671	須恵器・坏		※1.9	△10.0	内外面回転ナデ、底部回転糸切、底部内面仕上げナデ	灰色	良好		清水4
SD2	13	11	840・894・786	須恵器・坏		※2.5	△9.8	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切、内面仕上げナデ	淡青灰色	良好		清水3
SD2	14	11	813	須恵器・坏	△12.6	3.85	8.4	内外面回転ヨコナデ、底部ヘラ切り？後不定方向のナデ	淡青灰色	良好		福田や9
SD2	15	11	750	須恵器・坏	△12.8	3.45	7.6	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切	淡灰白色	やや悪		福田や7
SD2	16	11	751	須恵器・皿	△17.2	2.5	△12.6	内外面ヨコナデ、底部糸切後ナデ？	淡灰白色	やや悪		福田や13
SD2	17	11	852	須恵器・皿	△16.4	1.9	△7.2	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切	淡黄灰白色	やや悪		福田や14
SD2	18	11	766・800	土師質土器・椀	△17.4	8.7	△10.2	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		清水18
SD2	19	11	789	黒色土器・椀	△17.0	7.2	9.3	内面黒色処理。内外面同転ナデ、底部回転糸切	内面煤付着暗茶褐色、外面淡橙茶褐色	良好		清水2
SD2	20	11	625	黒色土器・椀	13.2	5.7	8.0	内外面同転ナデ、内面黒色処理、ミガキ。底部回転糸切	内面煤付着暗茶褐色、外面橙茶褐色	良好		福田や24
SD2	21	11	669	土師質土器・底部		※2.15	△6.3	内外面回転ナデ、底部糸切後ナデ	橙茶褐色	良好		清水11
SD2	22	11	688	土師質土器・坏	△12.8	4.7	5.2	内外面回転ナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		清水14
SD2	23	11	689	土師質土器・皿	△13.8	3.4	6.2	内外面回転ナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		清水17
SD2	24	11	815・803・831	土師質土器・皿	10.7	2.9	4.7	内外面ヨコナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		福田や6
SD2	25	11	794	土師質土器・皿		※1.4	4.7	内外面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		福田や32
SD3	26	12	733	土師器・甕	16.6	※20.0		口縁内外面ヨコナデ、外面胴部ハケメ、内面胴部以下ケズリ	淡橙褐色	良好		清水31
SD3	27	12	710	土師質土器・坏		※3.0	△8.0	内外面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		清水27
SD3	28	12	728・729	土師質土器・坏	△14.85	5.0	6.3	内外面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		福田や22
SD3	29	12	710	土師質土器・皿	△8.8	2.7	4.5	内外面回転ナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		清水13
SD3	30	12	710	土師質土器・皿	△9.6	2.75	3.9	内外面回転ナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		福田や2

遺構名	遺物番号	図版番号	取上番号	種別・器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	手法上の特徴	色調	焼成	備考	実測者No.
SD3	31	12	736	土師質土器・皿		※1.8	5.6	内外面ヨコナデ、底部回転糸切	橙茶褐色	良好		清水12
SD3	32	12	735	土師質土器・皿		※1.95	△5.2	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切	淡茶褐色	良好		福田や18
SD4	33	13	666	須恵器・壺	復14.0	※2.35		天井部へラケズリ後ナデ	青灰色	良好		駒子6
SD5	34	14	642	須恵器・甕	△23.4	※3.95		内外面ヨコナデ	青灰色	良好		駒子1
SD6	35	15	931	須恵器・底部		※2.6	△8.7	内面横ハケズリ、外面ヨコナデ	青灰色	良好		駒子7
SB1	36	19	184	土師質土器・皿		※0.7	△5.4	内面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		福田や26
SB1	37	19	185	土師質土器・皿		※1.1	△4.6	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		清水35
SB2	38	29	199	土師質土器・坏？	△12.4	※3.6		内外面ナデ	淡橙褐色	良好		清水34
SB2	39	29	205	土師質土器・皿		※2.25	△5.8	内外面ナデ、底部糸切	淡橙茶褐色	良好		福田や27
P55	40	22	121・403	須恵器		※11.6		内外面回転ナデ	淡灰色	良好		駒子8
P58	41	22	405	土師質土器・底部		※1.5	△13.4	内外面回転ナデ	赤色赤彩	良好		清水32
P35	42	22	179	土師質土器・底部		※1.0	△7.9	内外面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙褐色	良好		清水36
P80	F1	22	880	鉄製品・釘	長さ6.9	最大幅1.2	最大厚1.2					福田や44
遺構外	43	24	730	縄文土器・縄帯文土器	△32.0	※5.5		L1縁部外面肥厚	暗茶褐色	良好		清水43
遺構外	44	24	251	縄文土器・突帯文土器	△37.4	※3.7		口縁端部から垂れ下がるように付く刻目突帯	淡茶褐色	良好		清水45
遺構外	45	24	120	弥生土器・底部		※3.8	10.8	外面ハケ目、底部外面縁に指頭圧痕あり	橙茶褐色	良好		福田や17
遺構外	46	24	91	弥生土器・壺	△29.4	※3.2		内外面ナデ、口縁端面斜格子文、頸部貼付突帯	淡橙茶褐色	良好		清水46
遺構外	47	24	17	弥生土器・壺	△15.4	※4.5		内面ナデ、外面一部タテ方向のハケメ	淡橙色	良好		福田や40
遺構外	48	24	377	弥生土器・壺	△26.0	※2.5		口縁部ヨコナデ口縁端面2条凹線、端部刻み目、外面円形浮文、5条凹線	淡茶褐色上	良好		清水44
遺構外	49	24	297	弥生土器・甕	△14.2	※6.6		口縁部内外面ともヨコナデ、頸部以下内面ケズリ、外面ハケメ	淡橙褐色	良好		駒子4
遺構外	50	24	287	弥生土器・甕	19.0	※6.1		L1縁内外面ヨコナデ、内面頸部以下ケズリ	淡橙褐色	良好		清水30
遺構外	51	24	221	弥生土器・胴部片				貝殻腹縁による胸突文及び沈線文	赤橙褐色	良好		福田や42
遺構外	52	24	267・260・261・282	弥生土器・壺	16.6	※16.1		外面頸部以下ハケメ。内面頸部以下ケズリ	淡茶褐色	良好		福田や15
遺構外	53	24	235	弥生土器・壺	△15.0	※5.9		外面口縁部ヨコナデ、内面頸部以下ケズリ	暗赤褐色	良好		清水21
遺構外	54	24	219	弥生土器・甕	△13.8	※7.6		L1縁部内外面ヨコナデ、外面胴部以下ハケ目、内面胴部以下ケズリ	暗橙茶褐色	良好		福田や21
遺構外	55	24	522	甕	△13.0	※5.7		口縁部内外面ヨコナデ、内面頸部以下ケズリ	橙茶褐色	良好		福田や16
遺構外	56	24	262・267	甕	△18.4	※8.7		口縁外面及び頸部波状文、頸部ハケ状工具による連続刺突文	淡橙褐色	良好		福田や25
遺構外	57	24	31	甕	△16.2	※9.2		口縁部ナデ、内面頸部以下ケズリ	淡橙褐色	良好		清水23
遺構外	58	24	428	甕	△16.8	※14.4		外面ナデ、内面口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	橙褐色	良好		福田や20
遺構外	59	24	674	土師器・甕	△38.0	※15.0		L1縁部内外面ヨコナデ、胴部以下内面ケズリ、外面ナデ	淡橙褐色	良好		清水20

出土遺物観察表（2）

遺構名	遺物番号	図版番号	取上番号	種別・器種	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	手法上の特徴	色調	焼成	備考	実測者No.
遺構外	60	24	219	土師器・壺	△12.7	※7.1		口縁部内外面ヨコナデ、肩部内面ケズリ	淡茶褐色内面煤付着	良好		清水19
遺構外	61	24	898	土師器・甕	△18.2	※4.7		外面ハケメ、内面口縁部ナデ、頸部ハケメ後ナデ、指頭圧痕あり、頸部以下ケズリ	淡橙褐色	良好		厨子３
遺構外	62	24	884	土師器・甑	△20.0	※13.1		外面ハケメ、内面頸部以下ケズリ	淡橙茶褐色	良好		清水29
遺構外	63	24	348	鼓形器台	△23.4	※9.0		風化のため調整不明瞭	淡橙褐色	良好		福田や３
遺構外	64	24	824・825	鼓形器台	△16.4	※6.7		外面ミガキ、内面風化のため調整不明瞭	淡茶褐色	良好		厨子２
遺構外	65	25	416	弥生土器・器台		※6.9	△15.6	内外面ナデ	淡橙褐色	良好		清水25
遺構外	66	25	877	高坏		※7.65		受部内外面ナデ、脚柱部外面ハケメ	淡茶褐色	良好		厨子９
遺構外	67	25	303	低脚坏		※3.1	△10.6	内外面ナデ	黒茶褐色	良好		福田や41
遺構外	68	25	153	低脚坏		※2.9	8.9	外面ミガキ？脚裾に指頭圧痕。底部内面横方向のケズリ後ナデ。指頭圧痕あり。	淡茶褐色	良好		清水26
遺構外	69	25	686	土師器・高坏		※7.8	△10.2	外面脚柱部タテ方向のハケメ、脚裾部内面ヨコ、ナナメ方向のハケメ及びユビオサエ	淡橙茶褐色	良好	赤色塗彩	清水５
遺構外	70	25	332	弥生土器？底部		※3.5	△7.0	外面ナデ、内面ケズリ	淡橙褐色	良好		福田や36
遺構外	71	25	238	弥生土器・蓋	12.4	5.6	4.8	内面横方向のケズリ？外面タテ及びナナメ方向のハケメ後ナデ。摘み部分、内面に煤部分的に付着	淡黄茶褐色	良好		清水15
遺構外	72	25	384	弥生土器・蓋	9.0	4.0		内外面ナデ	淡橙褐色	良好		清水24
遺構外	73	25	655	土師質土器・底部		※2.8	△8.0	内外面回転ナデ、底部回転糸切後ナデ	淡橙褐色	良好		清水16
遺構外	74	25	622	土師質土器・坏		※3.05	7.7	内外面回転ナデ、底部回転糸切	内面煤付着暗茶褐色、外面橙茶褐色	良好		福田や12
遺構外	75	25	105	須恵器・坏身	△11.8	※3.7		口縁端部僅かに段を持つ。底部1/3ヘラケズリ	淡青灰色	良好		清水８
遺構外	76	25	393	須恵器・坏身	△10.0	※3.3		内外面回転ヨコナデ、底部下半ヘラケズリ	淡灰褐色	良好		清水７
遺構外	77	25	385	須恵器・蓋	△12.0	※3.5		風化のため調整不明瞭	淡黄灰白色	やや悪		清水10
遺構外	78	25	827	須恵器・蓋	△12.0	※4.2		内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後未調整	淡灰白色	良好		清水22
遺構外	79	25	355	須恵器・蓋	△13.2	※1.9		内外面回転ヨコナデ	淡灰白色	良好		福田や11
遺構外	80	25	927	須恵器・皿	△11.3	2.25	△5.9	内外面回転ナデ、底部回転糸切。底部の切り離し粗雑	青灰色	良好		福田や10
遺構外	81	25	658	須恵器・皿	△12.4	1.9	△6.6	内外面回転ヨコナデ、底部回転糸切	淡灰色	良好		福田や８
遺構外	82	25	564・550・551	須恵器・壺		※10.0		外面肩部～胴部回転ナデ、外面胴部下半ケズリ後回転ナデ。内面回転ナデ	淡灰黄白色	やや悪		清水28
遺構外	83	25	570	須恵器・甕	△16.0	※5.7		頸部タタキ後ナデ、肩部タタキ、内面頸部から肩部青海波紋タタキ	青灰色	良好		清水９
遺構外	84	25	558・673・696・749	須恵器・甕		※14.1		頸部内外面ヨコナデ、外面頸部以下平行タタキ、内面頸部以下青海波紋タタキ	青灰色	良好		福田や23
遺構外	85	25	305	緑釉陶器・小椀		※2.8	△5.8	内外面回転ナデ、底部回転糸切	淡橙色	並	近江産	日紫喜１
遺構外	86	25	127	白磁・椀	△15.2	※2.4		白磁椀Ⅱ類、貫入あり	灰白色	良好		清水37
遺構外	87	25	517・678	白磁・椀	△14.0	※3.25		白磁椀Ⅱ類、貫入あり	灰白色	良好		福田や30
遺構外	88	25	910	白磁・椀	△15.0	※2.4		Ⅴ－２類	白色	良好		清水38

出土遺物観察表（３）

遺構名	遺物番号	図版番号	取上番号	種別・器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	手法上の特徴	色調	焼成	備考	実測者
遺構外	89	25	914	白磁・皿	△10.2	※1.6		口唇・口売	灰白色	良好		福田や29
遺構外	90	25	392	白磁・皿		※1.1	△5.6	底部外面露胎、釉やや厚め	灰白色	良好		清水39
遺構外	91	25	476	青磁					淡緑灰色	良好	龍泉窯系	福田や35
遺構外	92	25	987	瓦質土器・鍋	△27.3	※3.7		内外面ナデ調整、腹部外面指頭圧痕	外面黒茶褐色、内面灰灰白色	良好		福田や1
遺構外	93	25	236	土錘	長さ 4.2	幅 2.55	厚さ 2.5				26.6g	岡子5
遺構外	P 2	25	866	鉄製品・釘	長さ 2.5	最大幅 0.65	最大厚 0.5					福田や43
遺構外	S 1	25	430	柱状片刃石斧	長さ 11.8	最大幅 3.4	最大厚 2.4				緑色凝灰岩 191.0g	清水47

出土遺物観察表（4）

写 真 図 版

図版 1

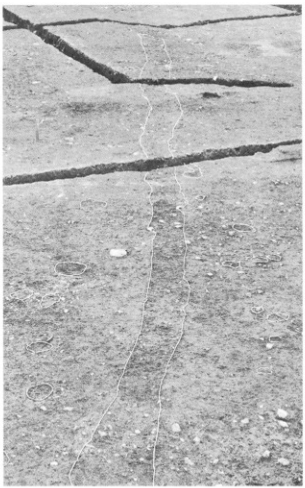
河原城より調査地をのぞむ　北西から

調査前空撮　南東から

図版 2

1区　調査前全景　南東から

2区　調査前空撮
西から



1区　SD1検出状況　北から

1区　SD1完掘状況　北から

1区　SB1・2完掘状況　北西から

図版 4

1区　SD1土層断面
南から

1区　包含層（茶灰褐色粘質土）
遺物出土状況（緑釉陶器）
北東から

1区　包含層（茶灰褐色粘質土）遺物出土状況　西から

２Ｂ区　ＳＤ２断面　南西から

２Ｂ区　ＳＤ２遺物出土状況
（黒色土器・椀）
東から

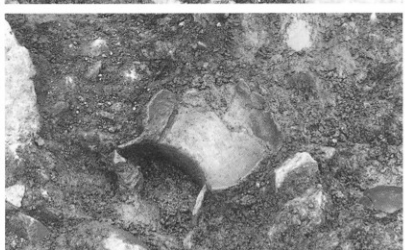
２Ｂ区　ＳＤ２遺物出土状況
（土師質土器・皿）
東から

図版 6

２Ｂ区　ＳＤ２完掘状況　西から

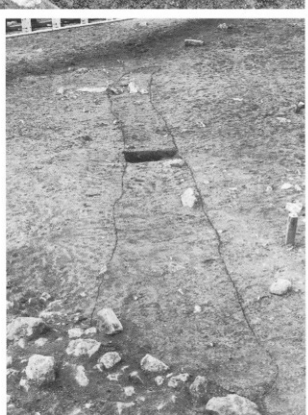
２Ｂ区　ＳＤ３断面及び完掘状況　北東から

２Ｂ区　ＳＤ３遺物出土状況
東から



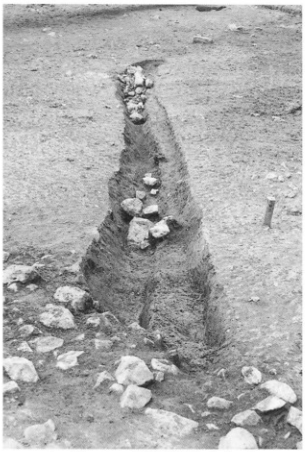
２Ｂ区　ＳＤ３遺物出土状況
東から

２Ｂ区　ＳＤ４土層断面　北西から



２Ｂ区　ＳＤ４検出状況　南東から

図版 8



2 B区　SD 4 礫検出状況　南東から

2 B区　SD 4 完掘状況　南東から

2 B区　SD 5 完掘状況　南から

2B区　SD5土層断面
南東から

2B区　SD6土層断面
北西から

2B区　SD6礫検出状況　南東から

図版10

2B区　SD7、8礫検出状況　東から

2B区　SD7土層断面　南東から

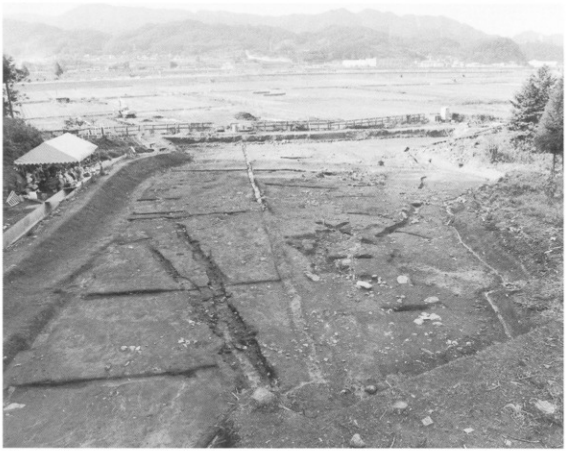
2B区　SD8土層断面　南東から

2B区　SD7、8完掘状況　東から

2B区　SD9検出状況　北東から

2B区　SD9完掘状況　北東から

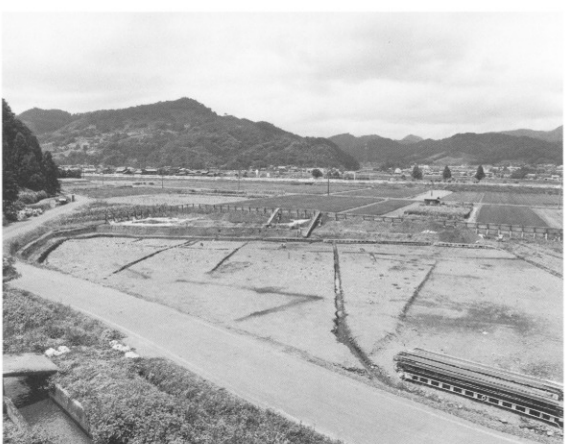
図版12



２Ｂ区完掘状況　南東から

２Ｂ区完掘状況　北西から

2Ａ区完掘状況　北から



1区完掘状況　東から

図版14

ＳＤ２　出土遺物（手前から20、19）

ＳＤ３　出土遺物（手前から29、30、28）

ＳＤ２　出土遺物（３）

ＳＤ３　出土遺物（26）

ＳＤ２　出土遺物（９）

ＳＤ１出土遺物（１）

P55出土遺物（40）

遺構外出土遺物（図版19キャプション参照）

図版16

〈50〉

〈52〉

〈56〉

〈57〉

〈58〉

遺構外出土遺物

（右53　左54）

（65）

（手前72　奥71）

遺構外出土遺物

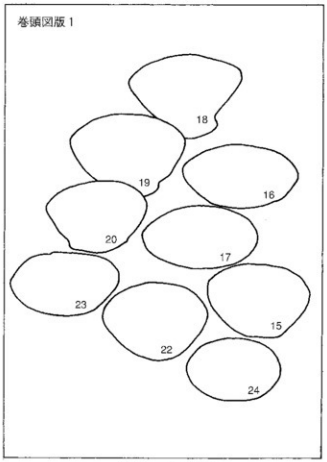
図版18

（手前77　奥78）

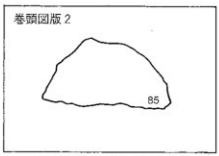
（82）

（62）

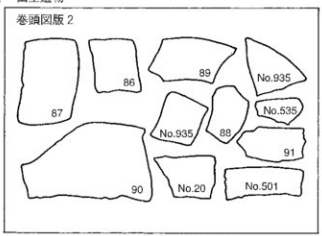
遺構外出土遺物　（S1）



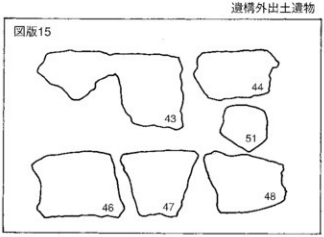
ＳＤ２　出土遺物



遺構外出土遺物　緑釉陶器



遺構外出土遺物　青磁・白磁



遺構外出土遺物　縄文土器・弥生土器

報告書抄録

ふりがな	たかふくだいしょうぐんいせき
書名	高福大将軍遺跡
副書名	中国横断自動車道姫路鳥取線(智頭～鳥取間)整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅲ
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	76
編著者名	鬼頭紀子、森本愉弘
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター
所在地	〒680-0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260番地　TEL（0857）27-6717
発行年月日	西暦2002（平成14）年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかふくだいしょうぐんせき 高福大将軍遺跡	とっとりけんやずぐん 鳥取県八頭郡 かわはらちょうたかふく 河原町高福	31323	1—218	35° 23′ 08″	134° 12′ 22″	20010507 ～ 20011031	4,931㎡	道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高福大将軍遺跡	その他の遺跡	古代～中世 時期不明	溝状遺構　4 掘立柱建物跡　2 溝状遺構　6 掘立柱建物跡　1 ピット	土師器、土師質土器、白磁、青磁 須恵器 弥生土器、縄文土器、鉄製品、石器	

鳥取県教育文化財団調査報告書　76

中国横断自動車道（智頭～鳥取間）整備事業にかかる
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

鳥取県八頭郡河原町

高福大将軍遺跡

発　行　2002年３月29日

編　集　財団法人鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680―0151　岩美郡国府町宮下1260

電話（0857）27―6717

発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団

印　刷　勝美印刷株式会社